

# オホーツク海沿岸湖沼における早春の オオワシとオジロワシについて

中川 元

〒099-43 北海道斜里郡斜里町字岩宇別531番地 (財)自然トピアしれとこ管理財団  
(前 斜里町立知床博物館)

## はじめに

オオワシ (*Haliaeetus pelagicus*) はロシア極東部のカムチャツカ半島やコリャク山脈周辺、アムール川河口域やサハリン北部等で繁殖し、冬期はソ連沿海地方、朝鮮半島、北日本等に南下する。オジロワシ (*Haliaeetus albicilla*) はユーラシア大陸北部に広く分布しており、極東ではカムチャツカ半島やオホーツク海北部の沿岸地域、サハリン、北海道等で繁殖し、冬期は朝鮮半島や日本に南下する。

北日本におけるオオワシとオジロワシの冬期の分布と個体数については、1980年より各渡来地において一斉カウントが継続されており、1985年には日ソ共同で冬期のオオワシ分布調査も行われた。これらにより北海道東部における冬期の渡来数はオオワシ、オジロワシともに2月がピークとなること、道東海岸に点在する湖沼では1月や4月上旬にワシ類が多く観察されることがわかってきた。(オジロワシ・オオワシ合同調査グループ、1982; 同、1985; 同、1988 Nakagawa et al, 1987)。しかしオホーツク沿岸の各湖沼のワシ類の渡来状況

については、これまでまとまった調査はなされていない。

本報告では、1985年と1986年及び1990年と1991年の早春にオホーツク海沿岸湖沼で調査した結果を報告し、オホーツク海沿岸湖沼がワシ類の渡りの中継地として果たす役割について考察する。

## 調査地と調査方法

北海道東北部、オホーツク海に面した海岸地域にある12の湖沼を調査した(図1)。調査した湖沼はすべて海跡湖で、面積は0.25km<sup>2</sup>から150.29km<sup>2</sup>と大小様々である。平均水深はサロマ湖、能取湖、網走湖がやや深いが、その他の湖沼はいずれも2m以下と浅い(表-1)。調査湖沼のうち湖面及び湖岸のはほぼ全域を調査できたのは声間大沼、メグマ沼、コムケ湖、シブノツナイ湖、トーフツ湖、濤釣湖である。クッチャロ湖、能取湖、網走湖は道路から離れた一部地域は調査対象から除いている。広大な面積を持つサロマ湖は、湖東端の栄浦周辺と西端の登栄床周辺を中心に調査し、湖中央の大部分は調査から除いた。能取湖は卯原内から平和にかけての南西部地域のみ調査し北部、東部地域は調査から除いている。

調査は1985年4月12日にコムケ湖より南部の7ヶ所の湖沼で、1986年4月16・17日に同上の湖沼で、1990年3月29日～4月1日に声間大沼から濤釣沼までの12ヶ所の湖沼について行った。トーフツ湖ではこのほかに4月7日と4月9日にも調査を行った。3月下旬から4月中旬は各湖沼で湖面の解水が進む時期である。1991年は1月と3月にトーフツ湖と網走湖(女満別湖畔)で調査を行った。

調査は自動車で移動しながら各湖沼の湖岸より10倍の双眼鏡と25倍のスコープを用いてワシ類の

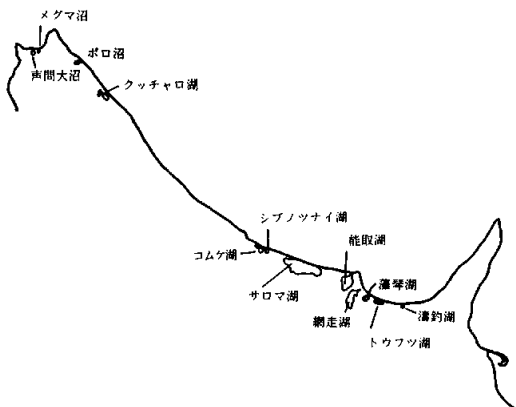


図1. 調査湖沼

表-1 調査湖沼の概要

湖沼名	成因	淡・汽水区分	湖沼型	面積(km <sup>2</sup> )	最大水深(m)	平均水深(m)	湖岸線(延長km)
声問大沼	海跡	淡水	腐植栄養	4.86	2.2	1.6	10.0
メグマ沼	海跡	淡水	腐植栄養	0.25	—	1.5	2.0
ポロ沼	海跡	汽水	腐植栄養	1.95	4.0	1.5	6.0
クッチャロ湖	海跡	汽水	富栄養	14.02	2.5	1.0	30.1
コムケ湖	海跡	汽水	富栄養	5.81	3.8	1.2	22.7
シブノツナイ湖	海跡	汽水	富栄養	2.76	3.0	—	8.2
サロマ湖	海跡	汽水	富栄養	150.29	20.0	8.7	86.7
能取湖	海跡	汽水	富栄養	58.51	21.2	8.6	32.4
網走湖	海跡	汽水	富栄養	32.87	16.8	6.1	39.2
藻琴湖	海跡	汽水	腐植栄養	1.12	5.8	1.8	5.6
トウフツ湖	海跡	汽水	富栄養	9.01	2.5	1.1	27.3
濤釣湖	海跡	淡水	富栄養	0.57	—	0.4	3.0

各湖沼のデータは環境庁(1987)「第3回自然環境保全基礎調査湖沼調査報告書」による。

種類と年齢、位置を記録した。調査範囲は湖面と湖岸部分とし周辺森林等は含んでいない。年齢は、成鳥と若鳥の2つに区分し、成羽の個体以外をすべて若鳥として記録した。

## 調査結果

### 1. 1985年の調査結果

各湖沼で観察されたワシ類の個体数は表2のとおりである。主な湖の状況を以下に記す。

- 1) コムケ湖 湖口から湖北側部分が開いておりスズガモ、ヒドリガモなど4,000羽以上のカモ類や300羽以上のオオハクチョウが見られ、ワシ類は開水面に接した氷の縁に6羽、湖中央の氷上に20羽、北部に分かれた2つの沼の氷上に14羽が観察された。魚を採食中と開水面で水浴中のオオワシがそれぞれ1羽観察された。
- 2) サロマ湖 栄浦ではライトコロ川河口付近から東奥に残った氷上にワシ類がまとまって止まっていた。河口や漁港付近の開水面にはヒドリガモ、ホシハジロなど2,000羽以上のカモ類やオオハクチョウが観察された。
- 3) 網走湖 北部はほぼ全面結氷しており、ワシ類は観察されなかった。南部の開水面にはオオ

ハクチョウやアオサギ、キンクロハジロ、ミコアイサなどの水禽類が多く観察され、ワシ類は開水面から少し離れた氷上に6羽、湖岸の樹上に1羽観察された。

- 4) トウフツ湖 氷上で観察されたワシ類の位置を図2に示す。ワシ類は湖東部平和橋付近の氷上に多く観察され、付近の開水面にはホオジロガモ、キンクロハジロ、ウミアイサ等のカモ類が500羽以上、オオハクチョウが350羽以上観察された。

### 2. 1986年の調査結果

各湖沼で観察されたワシ類の個体数は表3のとおりである。主な湖の状況を以下に記す。

- 1) コムケ湖 解氷が進んでおり湖南部にわずかに残った氷上にオオジロワシ若鳥が1羽観察された。
- 2) シブノツナイ湖 開水面はなかったが、氷は軟氷状であり、氷上にオオジロワシ1羽、オオワシ2羽が観察された。
- 3) サロマ湖 栄浦ではライトコロ川河口付近から東奥に氷がわずかに残っており、その上にオオジロワシ成鳥1羽が止まっていた。周辺にはアオサギやスズガモが観察された。

4) トウフツ湖 水上で観察されたワシ類の位置を図3に示す。ワシ類は湖東部平和橋付近の氷上に多く観察され、開水面にはウミアイサ、ミコアイサ、ヒドリガモ、ユリカモメ等が観察された。

### 3. 1990年の調査結果

各湖沼で観察されたワシ類の個体数は表4のとおりである。以下に調査湖沼についてワシの観察位置、湖の結氷状況、水禽類などを記す。

- 1) 声問大沼 沼の北側の一部が開いており、開水面に近い氷上にオジロワシの成鳥が1羽確認された。開水面には100羽前後のコハクチョウのほかホオジロガモ、ヒドリガモ、オナガガモが観察された。この沼から2km西にあるゴミ処理場でオジロワシの若鳥が1羽観察された。
- 2) メグマ沼 完全に結氷しており、ワシ類、水禽類ともに見られなかった。
- 3) ポロ沼 開水面にはコハクチョウが多数見られたがワシ類は確認されなかった。
- 4) クッチャロ湖 大部分が解氷していた大沼では西岸と東岸に少し残った氷上にオオワシ若鳥

6羽、オジロワシ若鳥4羽が止まっており、開水面には数千羽のコハクチョウ(オオハクチョウも混じる)が見られた。小沼はほぼ全域が結氷しており、西側の一部に開水面があった。オオワシ3羽、オジロワシ2羽は小沼中央付近の氷上に止まっていた。

- 5) コムケ湖 湖口から中央部にかけて開水面が広がっていたほか、湖の南部では流入する河川から水路のように細長く氷が開いていた。オジロワシとオオワシは細長い解氷部の回りに集中して止まっており(図4)、100羽以上のトビがワシと共に見られた。
- 6) シブノツナイ湖 ほぼ全面結氷しており、ワシ類、水禽類とも見られなかった。
- 7) サロマ湖 登栄床では西側と南側の岸沿いが結氷しており、湖口から湖中央部が大きく開いていた。オオハクチョウ、カモ類、カモメ類が開水面に見られたが、ワシ類は確認されなかった。栄浦ではライトコロ川河口部と湖東岸が開いており中央部は結氷していた。オオワシ2羽、オジロワシ1羽はライトコロ川河口部の川岸雪

表-2 オホーツク海沿岸湖沼のワシ類調査結果 — 1985年 —

湖 沼 名	調 査 日 時 時 刻	オ オ ワ シ			オ ジ ロ ワ シ			合 計	湖 面 の 結 氷
		成 鳥	若 鳥	小 計	成 鳥	若 鳥	小 計		
コムケ湖	1985. 4. 12 11:10-12:10	0	24	24	1	15	16	40	約50%以上開氷
シブノツナイ湖	1985. 4. 12 11:00-11:10	0	0	0	0	0	0	0	ほぼ全面結氷
サロマ湖(登栄床)	1985. 4. 12 10:30-10:40	0	0	0	0	0	0	0	ほぼ全面開氷
サロマ湖(栄浦)	1985. 4. 12 8:00-9:30	0	3	3	3	7	10	13	約50%以上開氷
能取湖	1985. 4. 12 7:15-7:30	0	0	0	0	0	0	0	ほぼ全面開氷
網走湖	1985. 4. 12 5:00-7:00	0	1	1	1	5	6	7	約10%開氷
トウフツ湖	1985. 4. 12 16:00-16:40	0	24	24	0	29	29	53	50~90%開氷
濤釣沼	1985. 4. 12 17:00-17:15	0	0	0	0	1	1	1	全面開氷

表-3 オホーツク海沿岸湖沼のワシ類調査結果 — 1986年 —

湖 沼 名	調 査 日 時 刻	オ オ ワ シ			オ ジ ロ ワ シ			合 計	湖 面 の 結 氷
		成 鳥	若 鳥	小 計	成 鳥	若 鳥	小 計		
コムケ湖	1986. 4. 16 14:00-14:40	0	0	0	0	1	1	1	南岸の一部軟氷
シブノツナイ湖	1986. 4. 16 13:50-14:00	2	0	2	0	1	1	3	全面結氷(軟氷)
サロマ湖 (登栄床)	1986. 4. 16 13:20-13:30	0	0	0	0	0	0	0	全面開氷
サロマ湖 (栄浦)	1986. 4. 16 11:30-12:00	1	0	1	0	0	0	1	南東沿岸軟氷
能取湖 (南西部)	1986. 4. 16 10:30-11:00	0	0	0	0	0	0	0	ほぼ全面開氷
網走湖	1986. 4. 16 9:30-10:20	0	0	0	0	0	0	0	北側開氷、南側軟氷
トウフツ湖	1986. 4. 16 8:10-9:00	4	18	22	0	9	9	31	50%以上開氷
濤釣沼	1986. 4. 17 9:30-9:40	0	0	0	0	0	0	0	50%開氷

表-4 オホーツク海沿岸湖沼のワシ類調査結果 — 1990年 —

湖 沼 名	調 査 日 時 刻	オ オ ワ シ			オ ジ ロ ワ シ			合 計	湖 面 の 結 氷	外 海 の 流 氷
		成 鳥	若 鳥	小 計	成 鳥	若 鳥	小 計			
声間大沼	1990. 3. 30 15:00	0	0	0	1	0	1	1	約10%開氷	な し
メグマ沼	1990. 3. 30 14:00	0	0	0	0	0	0	0	全面結氷	な し
ポロ沼	1990. 3. 31 10:30	0	0	0	0	0	0	0	約70%開氷	な し
クッチャロ湖	1990. 3. 31 11:00-13:00	1	8	9	1	5	6	15	大沼・50%開氷 小沼・10%開氷	な し
コムケ湖	1990. 3. 29 15:20-16:20	7	23	30	6	15	21	51	約50%開氷	な し
シブノツナイ湖	1990. 3. 29 15:00	0	0	0	0	0	0	0	ほぼ全面結氷	な し
サロマ湖 (栄浦・登栄床)	1990. 3. 29 12:00-14:00	1	1	2	0	1	1	3	約50%開氷	一部に流氷着岸
能取湖	1990. 3. 29 11:00	0	0	0	0	0	0	0	70%以上開氷	沖合に流氷帯
網走湖	1990. 4. 1 14:00	0	1	1	0	0	0	0	約10%開氷	な し
藻琴湖	1990. 4. 1 12:00	0	0	0	0	0	0	0	中央部僅か開氷	な し
トウフツ湖	1990. 4. 1 12:40-13:20	0	3	3	0	6	6	9	約20%開氷	な し
濤釣沼	1990. 4. 1 16:00	0	0	0	0	0	0	0	全面結氷	な し

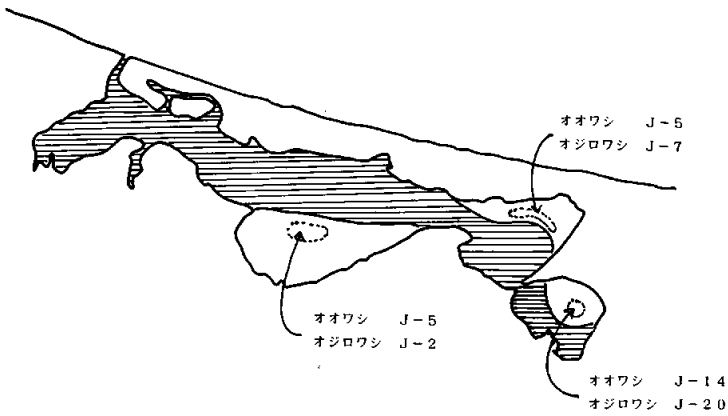


図2. トウフツ湖のワシ類 (1985. 4. 12)

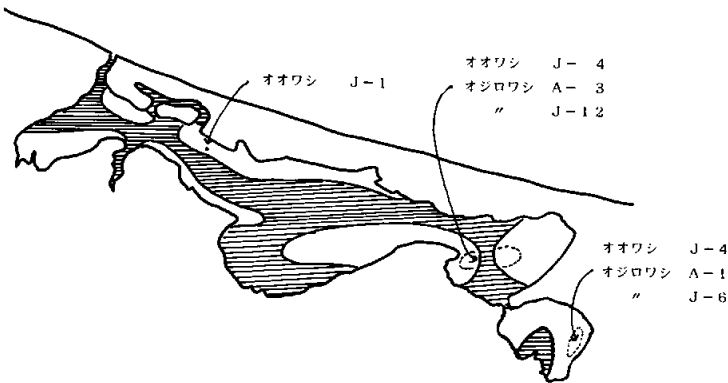


図3. トウフツ湖のワシ類 (1986. 4. 16)

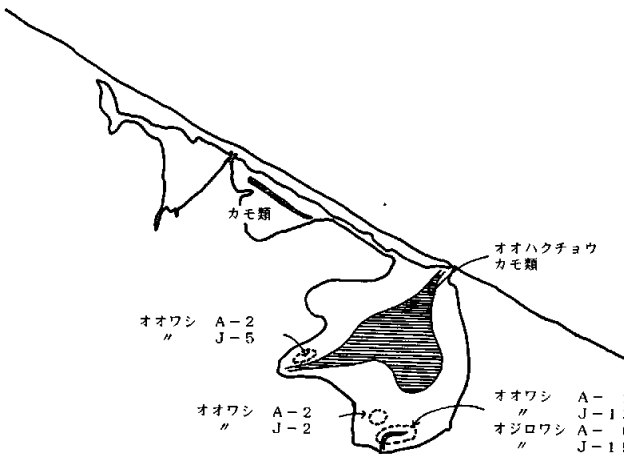


図4. コムケ湖のワシ類 (1990. 3. 29)

上と河口の氷上で観察され、内1羽は川辺で水を飲んでいて、他に多数のキンクロハジロとアオサギ、オオハクチョウが観察された。

8) 能取湖 河口から中央部が開き、湖南部は結氷していた。ワシ類は観察されなかった。

9) 網走湖 女満別湖畔では筋状に開水面がありその縁の氷上にオオワシ若鳥1羽が止まっていた。

湖北部は全面結氷しており、ワシ類は見られなかった。

10) 藻琴湖 湖中央部に開水面があったが、ワシ類は観察されなかった。

11) トウフツ湖 湖西側の湖口から丸万川河口付近及び、東側の平和橋周辺に開水面が広がっていた。

ワシ類はいずれも開水面近くの氷上に観察された(図5)。開水面にはオオハクチョウ、マガモ、カワアイサ、ホオジロガモ、カルガモ等の水禽類、中の島にはヒシクイ、アオサギが見られた。4月7日には湖東側の開水面が拡大しており、周辺に止まるワシ類も増加していた(表5、図6)。4月9日には湖のほぼ全面が開水しており、湖東端にわずかに氷が残っていたが、ワシ類はこのわずかな氷盤上に集まっていた。(図7)

12) 濤釣湖 湖面全体が結氷しており開水面は見られなかった。ワシ類は観察されなかった。

#### 4. 1991年の調査結果

トウフツ湖と網走湖の調査結果は表5及び表6のとおりである。以下にワシ類の観察位置、湖の結氷状況を示す。

1) トウフツ湖 1月31日は湖面全面が氷結しており、観察されたのは湖西部氷上に止まっていた個体と、北浜上空を西へ向かう個体でいずれもオオワシ成鳥であった。

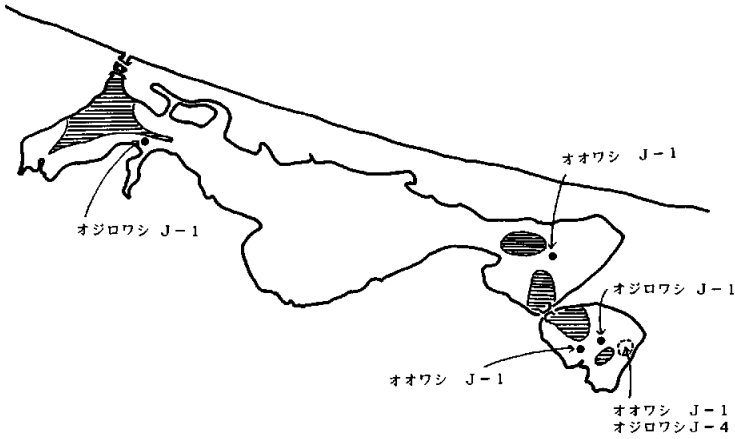


図5. トウフツ湖のワシ類 (1990. 4. 1)

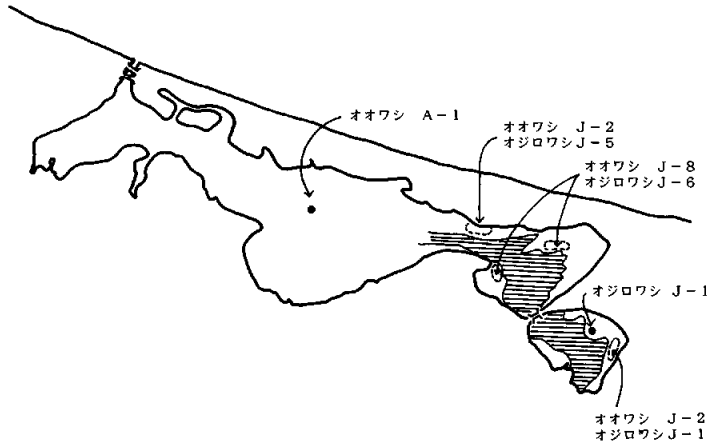


図6. トウフツ湖のワシ類 (1990. 4. 7)

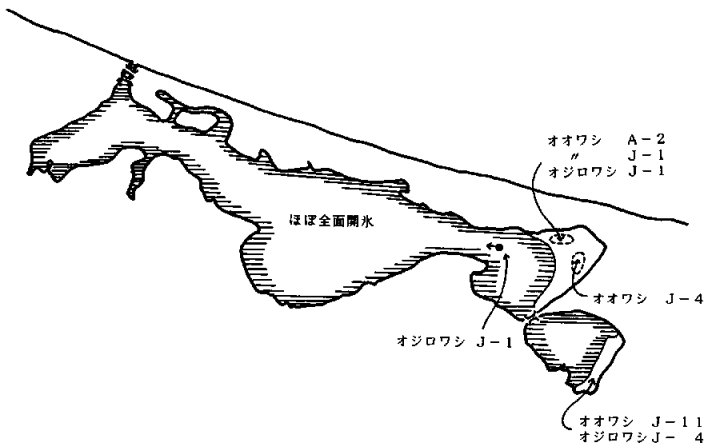


図7. トウフツ湖のワシ類 (1990. 4. 9)

3月28日にはほぼ全面が凍結していたが北浜周辺と平和橋付近にわずかに開水面があり、観察されたオオワシはいずれも開水面近くの水上に止まっていた。開水面には多数のマガモ、アオサギのほか、オオハクチョウ、ホオジロガモ、ウミアイサ等が見られた。

2) 網走湖 (女満別湖畔) 1月19日には全面氷結しておりワシの姿はなかった。3月25日にも全面氷結しており開水面は見られなかったが、氷の表面が溶けて柔らかな状態だった。氷上にオオワシ3羽と多数のトビが観察された。3月28日は結氷状況は3月25日と同様だった。当日氷下漁をやっていたようで漁業用スノーモービルが走行した跡が湖面についていた。ワシは2箇所にとままって観察され、船着場近くに27羽 (オオワシ4、オジロワシ23)、2キロほど遠方に11羽 (オオワシ9、オジロワシ2) が水上に止まっていた。船着場近くの氷上には捨てられた雑魚 (ウグイ) が多数あり、その周りにはトビが55羽、カラス、アオサギ1羽が集まって採食していた。ウグイはまだ生きているものもあり、捨てられて間がないと思われる。ワシ類はトビの周りを囲むように止まっており、この餌を求めて集まってきたものと考えられた。

表-5 トウフツ湖のワシ類

-1990年-

	オ オ ワ シ			オ ジ ロ ワ シ			合計
	成鳥	若鳥	小計	成鳥	若鳥	小計	
1990. 4. 1 12:40-13:20	0	3	3	0	6	6	9
1990. 4. 7 14:30-15:30	1	12	13	0	13	13	26
1990. 4. 9 14:00-14:30	2	16	18	0	6	6	24

-1991年-

	オ オ ワ シ			オ ジ ロ ワ シ			合計
	成鳥	若鳥	小計	成鳥	若鳥	小計	
1991. 1. 31 10:40-11:10	2	0	2	0	0	0	0
1991. 3. 28 12:00-13:00	3	0	3	0	0	0	3

表-6 網走湖女満別湖畔のワシ類 -1991年-

	オ オ ワ シ			オ ジ ロ ワ シ			合計
	成鳥	若鳥	小計	成鳥	若鳥	小計	
1991. 1. 19 9:50-10:10	0	0	0	0	0	0	0
1991. 3. 25 14:00-14:30	3	0	3	0	0	0	3
1991. 3. 28 15:30-16:30	6	7	13	13	12	25	38

### 考 察

今調査結果から、3月下旬から4月中旬のオホーツク沿岸湖沼の中には多くのワシ類の集まる湖沼があることがわかった。一方、ワシ類が全く見られないか、見られても少ない湖沼もあった。一般に湖面の解氷が進み、湖の半ばが氷結、半ばが開水面となっている湖にワシ類が多く、全面結氷した湖沼ではワシ類は少ないといえる。開水面には水禽類が多く、ワシ類はこれらの鳥類や魚類を餌にしていることが考えられた。一方1991年3月28日の網走湖のように、開水面の見られない場合でも漁業活動から餌が供給されている状況では多数のワシ類が観察された。トウフツ湖でのこれまでの観察でも、厳冬期の完全結氷している時期に観察されるワシ類は少なく、4月上旬の解氷期になるとオジロワシ、オオワシ共に数が多い。湖

の解氷の進み方には年による変動があり、ワシ類の数が多き時期も年によって変化していることが、トウフツ湖における今調査から推測された。

北海道東部で越冬するオオワシとオジロワシは、2月中・下旬に羅臼海岸に集中するが、3月には分散し、一部は北の繁殖地へ向かうものもあると考えられる。オオワシの渡りルートとしては宗谷岬とサハリンを結ぶルートが知られており(伊藤、1990)、オホーツク海沿岸はオオワシの渡りルートに位置している。流氷が沖合いに離れた後、3月下旬から4月中旬にかけて、ワシ類は半ば解氷し餌の豊富なオホーツク沿岸の湖沼で一時期滞留しながら、北の繁殖地へ徐々に北上していくものと考えられる。渡去期のワシ類にとって、オホーツク海沿岸の大小の湖沼は、餌の豊富な中継地として重要な場所となっていると考えられる。

## 要 約

1. 早春のオホーツク海沿岸湖沼において1985年、1986年、1990年、1991年にオオワシとオジロワシの調査を行った。
2. オオワシとオジロワシは開水面が広がり水禽類の多い湖沼と、漁業活動から餌が供給されている湖で多かった。
3. オホーツク海沿岸湖沼は渡去期のワシ類の滞留地として重要な役割を果たしていると考えられた。

## 文 献

- 伊藤正美, 1991. 北海道におけるオオワシの秋の渡り状況. 1990年度日本鳥学会大会講演要旨集.
- Nakagawa, H., Lobkov, E.G. & Fujimaki, Y. 1988. Winter censuses on *Haliaeetus pelagicus* in the Kamchatka Peninsula and northern Japan in 1985. *Strix*, 6: 14-19.
- オジロワシ・オオワシ合同調査グループ, 1982, オジロワシ・オオワシ一斉調査報告書. 根北郷土研究会. 斜里, 12p.
- オジロワシ・オオワシ合同調査グループ, 1985, オジロワシ・オオワシ一斉調査報告書 (第2報). 根北郷土研究会. 斜里, 28p.
- オジロワシ・オオワシ合同調査グループ, 1988, オジロワシ・オオワシ一斉調査報告書 (第3報). 根北郷土研究会. 斜里, 28p.